

県立高校未来創造ビジョン意見交換会（南学区）における主な意見

テーマ①県立高校が取り組む教育の重点

全ての生徒の可能性を引き出す教育

- ビジョンの重点1にある「生徒の実態と学びのニーズに対応した教育の充実」について、特別な支援を必要とする生徒も安心して進学できており、重要なことである。
- 今後の教育の在り方として、学力向上に加えて、人としての在り方を大事にしていきたい。
- 個別最適な学びを推進するのであれば、学校の状況に応じた教員配置による学びの保証が必要だと考える。
- 高校は、長期間付き合っていける友人づくりの場という側面もある。

地域を支える人づくり

- ビジョンの重点2にある「地域を支える人づくり」として、キャリア教育を明確に打ち出していることや地元産業界との連携について述べられていることも賛同する。
- 産業界の深刻な人手不足の中、産業高校で技術的なものを学び、地元企業と直接つながるようなシステムが今後より強く必要になる。
- アドバンスト・エッセンシャルワーカー育成は、高校教育だけで完結するものではなく、県全体の動きが必要になる。
- 町唯一の高校は、残ってほしいという思いがある。自分は町で就職して暮らしていくことを考えており、高校のボランティア活動などの姿が見えると活気が出る。
- 地域の学び場があったことで、自分も将来地域に残ろうと思えた。そのような場を発展させる仕組みができるとありがたい。
- 市内の高校の生徒が、学校で学んでいることを校外の活動でも発揮して活躍している姿が見られ、素晴らしい人材が育っていると感じている。
- A I の時代においてホワイトカラーの仕事が減少する中、地域を担うブルーカラー（技能職・技術職）を育てる産業高校の役割は今以上に重要になる。ただし、普通科志向の中では、中学生へのPRの方法について考慮する必要がある。
- 小国町は地域と生徒たちを結び付けてくれることがありがたい。授業での探究活動「白い森未来探究学」の発表会で、内向的だった県外留学生が「地域の皆さんと活動して、コミュニケーション力がついた、ここに来て良かった」と発表する姿に感銘を受けた。
- 少子化や定員割れという状況ではあるが、入学時、卒業時の学力の担保は必要である。ものづくりの現場に必要な最低限の基礎学力は身に付けていてほしい。また、高校段階で基礎的な資格や技術の証明を得られる仕組みがあれば、企業の即戦力としてありがたい。最新技術への対応も教育に取り入れていただけると、5～10年後の子供たちがものづくりに興味を持つための土台になると思う。
- キャリア教育としては、中学校段階から地域の企業を知ってもらうために会社紹介をしている。保護者にも伝えることが必要だと考えている。
- 小中学校のキャリア教育の推進という観点から、地元産業界の方々に受け入れていただいて感謝している。ビジョンでも重点2「地域を支える人づくり」に挙げていただき、高校まかせにせず地域でも力を入れる必要がある。
- 高校選択や就職でのミスマッチを減らすためにも、小中学校のうちから系統的なキャリア教育を行っていくことが必要となる。

新しい時代への対応

- 例えば普通科で学ぶ理数系の知識が他校の技術的な学びの中ではどのように使われているかを体験・実感できるような、県立高校同士で学校・学科を超え複合化した学びができると、新しい強みになるのではないかと。また、中学生の目線のPR方法を研究して発信してほしい。
- 長井高校の探究コースは魅力であるが、一般コースとの差が出ている。むしろ県立高校の普通科はすべて探究コースにして普通科の特色を出すとともに、生徒たちが自分で選択したテーマの学びにも向かえるようにしてはいかかがか。

魅力ある学校づくり

- 時代のニーズや生徒の多様なニーズに対応することが一層必要になっている。学び続ける教師として資質の向上のため、県外や海外研修を含む研修を増やしていただきたい。
- 小中学校の児童生徒が、自らの意志で地元の高校を選んで入学する流れを作れるよう、魅力ある県立高校を作っていただきたい。
- 中学校卒業生の進路は以前より広がっている。費用や通学の便などの理由で私立高校への入学者が増えている傾向にあるが、そのことを今後の県立高校が魅力化を図る際のヒントとして捉えることもできる。真似をするのではなく、生徒の将来についてどのような学びが必要かという観点で魅力化を勧めていく必要がある。
- 制服のデザインや学校の環境など、学びの内容以外に重きを置いて私立高校を選ぶ中学生も一定数いる。オープンスクールで実際に接していても増えていると感じる。
- 例えば制服を変えるべく活動をしようにも生徒だけでは限界があり、先生方も忙しく願いすることが難しい。結果的に変化が起こらず、公立高校は頭が硬いというイメージにつながってしまっている。
- 探究的な学びなど進学校としての特徴を詳しく説明するほど、中学生にとっては敬遠されてしまいがちで、PRに難しさを感じている。生徒主導での様々な活動を中学生へPRする機会を増やしていきたい。
- ビジョンにある「生徒数の減少をマイナスのみに捉えず」の言葉通り、生徒は探究のテーマやアイデアにして活動をしている。このような活動を後押しできるような人的な保障があればと思う。
- 魅力は色々なものがある。例えば小国高校は部活動がない分放課後の使い方が柔軟であり、地域活動やアルバイトができ、その魅力を発信していくことが大切である。

テーマ②県立高校の在り方に関する基本的な方向性

入学定員の設定、学級数の取扱い

- ある程度の学級規模は必要である。教育課程のみならず部活動に魅力を感じる生徒は一定数おり、多様な魅力を発揮するためにも生徒の数は必要である。一方で、支援を必要とする生徒を対象とした全日制高校も、1～1.5学級規模で必要と考える。また、2～3学級規模の学校は特色を出しにくい傾向もあるのではないかと。

市町村に唯一所在する1学年当たり1学級の県立高校の取扱い

- ビジョン期間中は市町村に唯一所在する1学年当たり1学級の学校を維持するという方向性については、自治体からの支援の在り方を考える上でもありがたい。卒業後のつながりも大事にして、町と学校の連携をさらに進めたいと考えている。
- 南陽高校は地域と密着した特色ある取組みをしていただいております。市民からも存続を望む声が寄せられている。
- ビジョン期間中、学校の維持を基本としていただいたことはありがたい。各市町同士も連携

しながら、小規模校だからこそできる特色を打ち出していく必要がある。

課程・学科の配置、学校・学科の特色化に向けた方向性

- 進学指導を充実できる規模の学校を8地区全てに配置することは、県全体を考えれば必要である。本校は興譲館とは異なる役割として、将来的に県や地元を支える人材の育成を担っている学校であると捉えている。
- 多様な交流を促進するため、県外生募集も強化できるとよい。
- 定時制は特認校や入選制度、教員数を工夫して「再チャレンジできる学校」という特色を出せないか。また通信制はサテライト校の設置検討や入学・転学しやすい制度整備を整え、全国的なニーズの高まりへ対応する必要がある。

県立高校の配置に関する各地区の方向性

- 併設型中高一貫教育校については特に注目している。置賜3市5町の置賜総合開発協議会からも今後要望していく。
- 10年後には中学校の生徒数は半減する見込みである。もし今後併設型中高一貫教育校ができて上位層が進学すると、既存の中学校の活動が成り立たなくなる懸念がある。
- 市議会の中でも、小中学校だけでなく高校の今後について注目されている。
- 東南置賜地区について令和7～8年度検討するとしていたことの見通しは。
(回答) 東南置賜地区の県立高校再編整備計画(令和2年3月)の「令和8年度以降の令和17年度を目途とする米沢市内の普通科高校の在り方と米沢市外の3つの高校の在り方については、令和7年度から令和8年度にかけて検討します。」については、ビジョン策定が令和8年3月になったため後ろ倒しになっている。
- 併設型中高一貫教育校の検討の際は、地元中学校の学校行事や部活動など、中学生への影響も十分に踏まえて検討いただきたい。
- 小規模校ならではの地域と結びついた教育は地域の存続に不可欠であり、特色ある学校として残ってほしい。

テーマ③その他

ビジョン全体について

- 文部科学省のグランドデザインに対して、現在の進捗状況は。
(回答) 3つの類型に対し先導拠点を選定し、現在申請している。その他の高校は、令和8年度中に策定予定の「実行計画」で対応する。
- 社会の変化が激しいため、ビジョンは5年ごとの見直しも必要ではないか。
- 町内の小学1年生が入学定員の2分の1とほぼ同数であることを踏まえると、今後10年間の間に「入学定員の2分の1に満たない」ことは十分起こりうる。5年後に見直しの機会も必要ではないか。
- ビジョンが、再編整備だけでなく、子供たちのために県立高校が進んでいく方向性を示す構成になっていることはありがたい。見直しの頻度も、世の中の変化を見極めて5年と言わずに修正を加えるようにしてはいいか。

交通事情について

- 交通手段がないことで中学生が高校を選べない状況は、生徒・高校の双方にとってマイナスになる。学校単独ではなく、県や自治体、事業者が連携して解決することはできないか。
- 飯豊町は町内に高校がなく、鉄道やバスなどの交通の便や交通費負担が高校選択に大きく影響している。

その他

- 保護者の立場として、少子化が切実な問題だと認識できた。